

耳鼻咽喉科学

1 構 成 員

	平成23年3月31日現在
教授	1人
准教授	1人
講師(うち病院籍)	2人 (2人)
助教(うち病院籍)	6人 (3人)
助手(うち病院籍)	0人 (0人)
特任教員(特任教授、特任准教授、特任助教を含む)	0人
医員	3人
研修医	0人
特任研究員	0人
大学院学生(うち他講座から)	2人 (0人)
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員(教務職員を含む)	1人
その他(技術補佐員等)	2人
合計	18人

2 教員の異動状況

- 峯田 周幸 (教授) (H15.5.1～現職)
- 水田 邦博 (准教授) (H15.11.1～19.3.31 助教授; 19.4.1～現職)
- 橋本 泰幸 (講師) (H20.11.1～現職)
- 細川 誠二 (講師) (H16.4.1～19.3.31 助手; 19.4.1～22.2.28 助教; 22.3.1～現職)
- 大和谷 崇 (助教) (H16.3.1～19.3.31 助手; 19.4.1～現職)
- 岡村 純 (助教) (H21.12.1～現職; 23.1.1～休職)
- 三澤 清 (助教) (H22.4.1～現職)
- 高橋 吾郎 (助教) (H22.10.1～現職)
- 杉山 健一 (助教) (H23.1.1～現職)
- 中西 啓 (診療助教)(H23.3.1～現職)

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成22年度
(1)原著論文数(うち邦文のもの)	24編 (14編)
そのインパクトファクターの合計	20.28

(2)論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3)総説数(うち邦文のもの)	0編 (0編)
そのインパクトファクターの合計	0.00
(4)著書数(うち邦文のもの)	6編 (6編)
(5)症例報告数(うち邦文のもの)	3編 (2編)
そのインパクトファクターの合計	1.15

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Nakanishi H, Ohtsubo M, Iwasaki S, Hotta Y, Mizuta K, Mineta H, Minoshima S.: Hair roots as an mRNA source for mutation analysis of Usher syndrome-causing genes. J Hum Genet 55: 701–703, 2010.
2. Nakanishi H, Ohtsubo M, Iwasaki S, Hotta Y, Takizawa Y, Hosono K, Mizuta K, Mineta H, Minoshima S.: Mutation analysis of the *MYO7A* and *CDH23* genes in Japanese patients with Usher syndrome type 1. J Hum Genet 55: 796–800, 2010.
3. Nakanishi H, Mizuta K, Hamada N, Iwasaki S, Mineta H.: Hereditary isolated ossicular anomalies in two generations of patients. Auris Nasus Larynx 38: 114–118, 2011.
4. Takizawa Y, Mizuta K, Hayasaka T, Nakanishi H, Okamura J, Mineta H, Setou M.: Specific Localization of Five Phosphatidylcholine Species in the Cochlea by Mass Microscopy. Audiol Neurootol. 2010 Dec 15;16(5):315-322.
5. Hosokawa S, Mineta H: Tortuous internal carotid artery presenting as a pharyngeal mass. J Laryngol Otol 124(9): 1033-1036, 2010.
6. 中西啓, 岩崎聡, 瀧澤義徳, 橋本泰幸, 水田邦博, 峯田周幸: 非典型的臨床症状を示した USH2A 遺伝子変異例. 耳鼻臨床 103: 413-419, 2010.
7. 瀧澤義徳, 峯田周幸: 【お母さんへの回答マニュアル耳鼻咽喉科 Q&A 2010】 顔面・頸部編 子どもの頸のリンパ腺が腫れていると言われましたが、リンパ腺とは何ですか？また、なぜ腫れるのですか？. JOHNS(0910-6820) 26(9):1534-1536, 2010.
8. 高橋吾郎: ガイドラインにおける鼻噴霧用ステロイド薬の位置づけ. アレルギーの臨床 (0285-6379)30 巻 11 号 Page985-990(2010.10)
9. 三澤 清, 峯田周幸: HPV ワクチン JOHNS. 26(11): 1840-1844. 2010
10. 三澤 清, 峯田周幸: HPV ワクチン 頭頸部癌. 36(4): 456-460. 2010
11. 細川誠二, 中村悟己, 岡村純, 瀧澤義徳, 八木悠樹, 中安一孝, 鳥居直子, 峯田周幸: 耳下腺 MALT リンパ腫の臨床的検討. 耳喉頭頸 82(2):105-109,2010
12. 細川誠二, 八木悠樹, 岡村純, 瀧澤義徳, 峯田周幸: 上咽頭クラミジア感染症例. 耳鼻臨床 103(4):317-321, 2010.
13. 細川誠二, 岡村純, 瀧澤義徳, 高橋吾郎, 大和谷崇, 峯田周幸: 頭頸部原発 MALT リンパ腫の臨床的検討. 耳鼻臨床 104(1): 47-53, 2011.
14. 細川誠二, 安原智洋, 岡村純, 瀧澤義徳, 高橋吾郎, 三澤清, 大和谷崇, 峯田周幸: 耳下腺唾液腺導管癌例の臨床的検討. 耳鼻臨床 104(2):109-113, 2011.

15. 細川誠二、望月大極、岡村純、瀧澤義徳、竹下有、酒井直人、峯田周幸：鼻副鼻腔に進展した下垂体腫瘍症例．耳喉頭頸 83(3): 233-236, 2011.
16. 水田邦博、中西啓．耳管開放症の治療経験．耳鼻咽喉科臨床 103: 702-703, 2010.
17. 峯田周幸．患者にやさしいインフォームドコンセント．JOHNS 26：1879-1883, 2010
18. 峯田周幸．頭頸部腫瘍診療の論点に寄せて．JOHNS 26：1603, 2010
インパクトファクターの小計 [8.41]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. 高木なつ子、加藤明彦、仲山順子、齋藤えり子、深谷文香、山本知広、金子誠、平野美佳子、山内克哉、中村利夫、青木克憲、峯田周幸．頭頸部がん治療による体重減少および経口摂取不足に対し、NSTによる栄養介入の有用性．日本病態栄養学会誌 13(1): 35-39, 2010.
インパクトファクターの小計 [0.00]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Chikamatsu K, Takahashi G, Sakakura K, Ferrone S, Masuyama K.: Immunoregulatory properties of CD44+ cancer stem-like cells in squamous cell carcinoma of the head and neck. Head Neck. 2011 Feb;33(2):208-15
2. Kanazawa T, Misawa K, Carey TE.: Galanin Receptor Subtype 1 and 2 as therapeutic targets in head and neck squamous cell carcinoma. Expert Opinion on Therapeutic Targets. 14:289-320. 2010 Review
3. Kimura Y, Suzuki D, Tokunaga T, Takabayashi T, Yamada T, Wakisaka N, Yoshizaki T, Murata H, Miwa K, Shoujaku H, Watanabe Y, Yamada N, Ito Y, Yuta A, Takeuchi K, Hosokawa S, Mineta H, Hasegawa Y, Fujimoto Y, Nakashima T, Fujieda S: Epidemiological analysis of nasopharyngeal carcinoma in the central region of Japan during the period from 1996 to 2005. Auris Nasus Larynx 38(2); 244-249, 2011.
4. Kanazawa T, Nokubi M, Takizawa K, Matsuzawa S, Shinnabe A, Mineta H, Iino Y. KIT and platelet-derived growth factor receptor α gene expression in laryngeal small cell carcinoma. J Laryngol Otol. 2010 124:1340-3.
5. Jie Fang Chisako Izumi and Kuni H. Iwasa : Sensitivity of Prestin-Based Membrane Motor to Membrane Thickness. Biophysical Journal Vol98 June 2010 2831-2838
インパクトファクターの小計 [11.87]

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 橋本泰幸：健康で若々しく生きる！浜松医科大学公開講座 2010. pp46-pp51, 静岡新聞社, 2011
2. 細川誠二：VI 頸部／気管食道科学．図解耳鼻咽喉科 (市村恵一編), pp192-pp208, 金芳堂, 京

- 都, 2011.
3. 峯田周幸. 日本耳鼻咽喉科用語解説集 (金芳堂)
 4. 峯田周幸. 眼窩骨膜下膿瘍に対する手術治療のEBMとは? : EBM 耳鼻咽喉科・頭頸部外科の治療 (中外医学社)
 5. 峯田周幸. 喉頭腫瘍、HPV ワクチン : 耳鼻咽喉科・頭頸部外科研修ノート (診断と治療社)
 6. 峯田周幸. 頸部・気管食道学、 図解 耳鼻咽喉科 (金芳堂)

(5) 症例報告

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Misawa K, Imai A, Sugiyama K, Seki A, Mineta H.: A right-sided fourth branchial cleft cyst: a case report. International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology 75:438-440. 2011
2. 大和谷崇、峯田周幸、磯垣淳、和田英俊. 症例をどうみるか 腐食性食道炎に対して喉頭温存上部消化管再建を施行した1例. JOHNS 26(6): 945-948. 2010
インパクトファクターの小計 [1.15]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 岩崎聡、中西啓、姜洪仁、水田邦博.: BAHA 両耳装用の1症例 有効性の評価. 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 82: 475-478, 2010.
インパクトファクターの小計 [0.00]

4 特許等の出願状況

	平成22年度
特許取得数(出願中含む)	0件

5 医学研究費取得状況

	平成22年度
(1) 文部科学省科学研究費	4件 (305万円)
(2) 厚生科学研究費	1件 (100万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	0件 (0万円)
(5) 受託研究または共同研究	0件 (0万円)
(6) 奨学寄附金その他(民間より)	11件 (450万円)

(1) 文部科学省科学研究費

- 峯田周幸 (代表者) 基盤研究 (C) 頭頸部癌の上皮間葉移行に関する臨床的および基礎的研究
90万円 (継続)
- 中西 啓 (代表者) 若手研究 (B) 毛根 cDNA を用いたアッシャー症候群・難聴の簡易精密遺伝子診断法の確立 130万円 (新規)
- 高橋吾郎 (代表者) 若手研究 (B) スギ花粉症患者に対する医師の薬剤処方パターンに関する研

究 80 万円 (新規)

姜 洪仁 (分担者) 挑戦的萌芽研究 聴覚モデルに基づく新しい人工内耳による音声・音楽信号処理の研究 5 万円 (継続) 代表者 静岡大学 北澤茂良

(2) 厚生科学研究費

水田邦博 (分担者) 難治性疾患克服研究事業、急性高度難聴に関する調査研究 100 万円 (継続) 代表者 慶応義塾大学 小川郁

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	1件
(3) 学会座長回数	0件	6件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	12件
(6) 一般演題発表数	3件	

(1) 国際学会等開催・参加

5) 一般発表

ポスター発表

1. Takizawa Y, Mizuta K, Hayasaka T, Nakanishi H, Okamura J, Mineta H, Setou M. :Specific localization of five phosphatidylcholine species in the cochlea by using mass microscopy. 34th ARO (The Association for Research in Otolaryngology) MidWinter Meeting, Baltimore, MD, USA, Feb 19-23, 2011.
2. Nakanishi H, Ohtsubo M, Iwasaki S, Hotta Y, Takizawa Y, Hosono K, Mizuta K, Mineta H, Minoshima S. :Mutation analysis of the *MYO7A* and *CDH23* genes in Japanese patients with Usher syndrome type 1. 34th ARO (The Association for Research in Otolaryngology) MidWinter Meeting, Baltimore, MD, USA, Feb 19-23, 2011.
3. Izumi C, Jonathan Bird, Thorsten J. Schaechinger, Dominik Oliver and Kuni H. Iwasa : Sensitivity of non-mammalian prestin have on membrane thickness. 34th ARO (The Association for Research in Otolaryngology) MidWinter Meeting, Baltimore, MD, USA, Feb 19-23, 2011.

(2) 国内学会の開催・参加

3) シンポジウム発表

第 20 回 日本頭頸部外科学会 (社会からみた頭頸部外科医)

4) 座長をした学会名

峯田周幸 第 111 回日本耳鼻咽喉科学会

峯田周幸 第 34 回日本頭頸部癌学会

峯田周幸 第 72 回日本耳鼻咽喉科臨床学会
 峯田周幸 第 19 回日本頭頸部外科学会
 峯田周幸 第 58 回中部地方部会連合会
 水田邦博 第 111 回日本耳鼻咽喉科学会総会

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

峯田周幸 日本耳鼻咽喉科学会静岡県地方部会長
 峯田周幸 日本耳鼻咽喉科学会評議員
 峯田周幸 日本頭頸部学癌学会評議員
 峯田周幸 日本口腔咽頭学会評議員
 峯田周幸 日本鼻科学会評議員
 峯田周幸 日本喉頭科学会評議員
 峯田周幸 日本頭頸部外科学会理事
 峯田周幸 日本気管食道学会評議員
 峯田周幸 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会評議員
 峯田周幸 日本耳鼻咽喉科感染症研究会評議員
 峯田周幸 耳鼻咽喉科臨床学会評議員
 水田邦博 日本耳鼻咽喉科学会評議員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数(レフリー数は除く)	2件	0件

(1) 国内の英文雑誌の編集

Auris Nasus Larynx (Editorial Board)
 Japanese Journal of Clinical Oncology (Editorial Board)

9 共同研究の実施状況

	平成22年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	2件
(3) 学内共同研究	0件

(2) 国内共同研究

研究リーダー：岡山大学耳鼻咽喉・頭頸部外科 福島邦博
 厚生労働科学研究費補助金「感覚器障害戦略研究・聴覚障害」聴覚障害児の療育等により言語能力等の発達を確保する手法の研究
 研究代表者：京都大学大学院 健康情報学分野 宮崎貴久子
 厚生労働科学研究費補助金 基盤研究 (B)「緩和ケアへの移行と実施の円滑化に向けた研究：診療ガイドラインと QOL 評価の課題」

10 産学共同研究

	平成22年度
産学共同研究	0件

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. ヒト乳頭腫ウイルスに（HPV）による頭頸部癌発癌の分子メカニズムの解明について

頭頸部癌はヒト乳頭腫ウイルスに（HPV）による感染と因果関係が深い、といわれている。我々は臨床検体から中咽頭（特に扁桃）癌と極めて密接に関係していることを報告した。そして HPV タイプ 16 が多く癌組織に発現していた。HPV が頭頸部組織に感染し、早期遺伝子 E2 がプロモーター領域で切断され、環状ウイルスが線状ウイルスに変化する。E2 遺伝子による E6 および E7 遺伝子への抑制がとれる。そして E6 および E7 遺伝子が過剰発現することによって E6 遺伝子産物は p53 遺伝子に、E7 遺伝子産物は Rb 遺伝子に結合して、それぞれの腫瘍抑制遺伝子を不活化する。これが HPV による発癌メカニズムの一つと考えられている。そこで頭頸部癌の培養細胞に野生型 E2 遺伝子を導入することによって、癌細胞の消退あるいは増殖能低下を確認できるか検討した。現在、野生型 E2 遺伝子を遺伝子導入をおこなっている。今後アポトーシスの程度を確認する予定でいる。

また、もう一つの実験系では、E6 および E7 遺伝子を RNA 干渉を用いて頭頸部癌細胞の発育程度を調べている。臨床ではおおよそ 20% の頭頸部癌細胞から HPV が検出されているが、p53 遺伝子の発現異常とは相関はなく、PTEN(phaosphatase and tensin homolog) 遺伝子の不活化と密接な関係があり、学会報告した。

(峯田周幸、細川誠二)

2. めまい患者における自律神経機能の臨床的研究

本研究は、自律神経機能障害が原因と考えられる症例に対して、心電図 R-R 間隔の周波数スペクトル成分による変動係数、自発脳波 (EEG)、加速度脈波 (SDPTG)、脈波伝播速度 (PWV)、血圧を用いて、安静時 (臥位)、安静時 (臥位) から立位後の経時的な変動ならびに安静時 (臥位) から頭下位後の経時的な変動、および起立・頭下位負荷時の自律神経機能を測定し、めまいの発症にどのように関わっているのかを調べることを目的とした。

自律神経機能障害を伴っていると考えられるめまい症例に、安静時 (臥位)、安静時 (臥位) から立位後の経時的な変動ならびに安静時 (臥位) から頭下位後の経時的な変動、および起立・頭下位負荷時の自律神経機能を測定することで、健常者で得られた自律神経機能の結果と比較することで自律神経機能がめまいの発症にどのように関わっているのかを検討した。

(峯田周幸)

3. 耳管開放症の研究

耳管開放症の症例をまとめ、Otology Japan に報告した。今後も診断、特に低音障害型難聴との鑑別を明確にし、適切な治療を目指す。

(水田邦博、大和谷崇、瀧澤義徳、細川久美子、中西 啓)

4. 質量顕微鏡による内耳の分析

蝸牛を質量顕微鏡により解析し Audiol Neurotol に報告した。今後も継続しさまざまな病態での解析を行う。

(水田邦博、瀧澤義徳、杉山健一、中西 啓、泉智沙子)

5. 真珠腫性中耳炎の手術的治療

耳管機能を詳細に検討し耳管機能に見合った手術を行い、成績の向上を目指す。

(水田邦博、大和谷崇、瀧澤義徳、細川久美子、中西 啓)

6. スギ花粉症患者に対する医師の薬剤処方パターンに関する研究（科学研究費補助金（若手B））の一環として、日本医療データセンターのレセプトデータを用いて、春季アレルギー性鼻炎患者の医療機関への受診動向、薬剤処方内容を主とした診療内容等を調査する研究の実施可能性を検討した。本データベースは、同一個人を経時的に追跡できること、母集団への出入りが5%前後と低値であることなどの特徴を有する。しかし、企業の社会保険レセプトを連続して収集したものであるため、65歳以上の加入者は少ないという偏りがある。また、レセプトデータ単体からは疾患の亜分類・重症度は不明である。これらの点を考慮した上で、データの解析・解釈を行う必要があるものの、スギ花粉症に関しては疫学的評価も可能であると判断された。スギ花粉症のように高い有病率（約25%）と推計されている疾患の場合、実際の受療動向に関する検討は重要であると考えられた。

(高橋吾郎)

7. アッシャー症候群（USH）は、感音難聴に網膜色素変性症を合併する常染色体劣性遺伝性疾患である。現在までに、難聴に視覚障害を合併する疾患は約40種類知られているが、本疾患は全患者数の約半数（5/10万人）を占める最多の疾患である。欧米ではUSHの遺伝子解析が進んでいるが、本邦では遺伝子解析があまり行われておらず、日本人における変異スペクトラムについてはほとんど検討されていない。

我々は、USH患者19人を対象として原因遺伝子の1つである *USH2A* 遺伝子解析を行い、15人の患者で23種の疾患原因と考えられる変異を同定した。23種の疾患原因変異の中で19種は新規であり、そのうち1種（c.8559-2A>G）は4人に共通する遺伝子変異であった。これらのことより、本邦でも欧米人と同様に *USH2A* 変異により発症するUSH患者が多いこと、一方で本邦における *USH2A* 症例の変異スペクトラムは欧米人とは全く異なっていることを明らかにした。

(中西 啓)

8. めまい・平衡機能障害患者における歩行の解析

めまい・平衡機能障害患者の歩行時のふらつきを客観的に解析するため、加速度センサー

内蔵小型心電計を用い、歩行5分、歩行前後の安静着座時各5分の計15分間の心電図を計測した。加速度・心電図解析から、左右・前後・上下方向の歩行軌跡や自律神経の変化など読み取ることで、その動態を数字でとらえ、めまい・平衡機能障害患者の歩行時のふらつきに対する、新しい知見を得ることを目的とした研究である。本研究は、当科と静岡大学電子工学研究所ならびに静岡工業技術研究所との共同研究であり、現在集めたデータを解析中である。

(峯田周幸、榎本美紀)

9. いびき、睡眠呼吸障害を有する低身長児における手術前後の比較検討

いびき、睡眠呼吸障害を有する低身長児において、アデノイド・両側口蓋扁桃摘出術を施行することによって、睡眠呼吸状態や成長にどのような影響があるのかを検討する。術前後のAHIや血中IGF-1, IGF-BP3、身長・体重、骨年齢などを比較する。本研究は、当院小児科の協力を得ながら、今後症例を重ねていく予定である。

(榎本美紀、橋本泰幸)